

第4回（7月9日）

日本語「けど」発話末の用法 —語用論的分析

井谷 玲子

「お茶がはいりましたけど…」等が妻が夫に何かを要請（例えば「食卓に来て飲んで下さい」）したい時に発話された時、「けど」を発話末に付けない場合に比べて、より丁寧な発話として解釈される（Mizutani & Mizutani 1987）。しかし「あの人は頭いいけど…」のように「けど」の付加によって何かが否定的な要素が含まれることとなり、丁寧さのレベルが上がらない場合もある。従って「けど」そのものが丁寧さという意味を持つとするのは明らかに誤りであり、発話末の「けど」は発話中の接続詞「けど」と同じ意味とし、丁寧さを語用論的に分析するのが妥当であると思われる。上記の文で「けど」を付加しても付加しなくても「食卓に来て飲んで下さい」という要請が出るとする。では「けど」がある時とない時の差異は、接続詞「けど」が付いた時には「けど」の後の部分、つまり第二連結節が省略されていると見なされるが、「けど」がない場合は省略発話とは見なされないという差異である。次に第二連結節に何が省略されているかという問題であるが、それは確定的なものでなく、不確定的なものであり、第一連結節から含意される要請（「食卓に来て飲んで下さい」）と逆接関係を保つものであれば、広範囲のものが可能なのである。例えば「お忙しいかもしれない」「お茶は欲しくないかもしれない」といったものである。これらが話者が含意している要請と逆接関係となる故、その要請を弱めることになるのである。これは関連性理論における文脈効果の一つの、既存想定 の排除とまでは行かないが、既存想定 の弱化と見なすことができ、語用理論で発話末「けど」の丁寧さを説明することの正当性を示していると言える。

参考文献

- Mizutani & Mizutani (1987) How to be polite in Japanese. The Japan Times, Tokyo.
Sperber & Wilson (1986) Relevance : Commu-
niation and Cognition Blackwell, Oxford.